

昭和三七年 上代文学研究論文要旨 補遺

中 西 進

前 記

1 本稿は本誌一四号に掲載した「昭和三七年上代文学研究論文要旨」に脱落した論文を補つたものである。

2 これになお漏れた論文所載誌は左のものである。

神戸女子短大論攷 一八号  
まほろば 六号

二 万 葉 集

1 概 説

万葉集にあらわれた服飾 山田清野 島根

女子短期大学紀要(一、一二月)八頁

万葉集歌に見える衣服材料は麻が大部分を占め、色は白が圧倒的に多く、最も高貴な色はむらさきである。染色は種々の植物を用い、形態も男女の未分化から大陸との文化交流によつて美化されていつたが、一般庶民のそれは初期の服装を持ち続けた。装身具としては櫛・玉の緒が信仰的に用いられ、たまき

・くしろ・かざし・かづら等もある。これら大自然ときりはなせない衣生活は情緒豊かなつかしいものである。

万葉集長歌試論 小林正治 国語(栃木県高等学校国語科研究会)(二、九月)六頁

万葉集の長歌は(一)モチーフとテーマの分離した型、(二)モチーフのテーマ化した型、(三)モチーフがテーマを形成する型に區別して見ることができ、人麿・赤人・憶良の歌をそれぞ

れ例とする。この観点から長歌の展開様式を見ることによつて、作歌態度、文学理解また統一原理を見究めることができる。

万葉集序詞索引 序詞のイメージのために

(一) 菅野 宏・菅野顕光 福島大学学芸学部論集(一三・二、三月)一九頁

序詞の用いられる万葉歌をその主想部(序詞によつてひきおこされる表現部分)の五十音順によつて排列、「の」形式と、非「の」形式の連体修飾・運用修飾・主述・中止法と、そして意味的關係のない特殊なものに分

つ。これを検するに作者の文学的関心と目的とは序詞にこそ存し、これを第一主題、主想部を第二主題とすることができ。同音繰返しは序詞の素材の同一律的・二面性で主想と結合しているといえる。

防人歌の性格 高里盛国 上代文学会会報(二二、一一月)四頁

防人の歌は人間味のある歌で、消極的ながらも自己を主張し、表現して生まれたものである。

万葉集と懐風藻 二(上代文学における中国文学の影響) 木村 敏 上代文学会会報(二二、一一月)五頁

懐風藻と万葉集から仙柘枝の詩歌、七夕の詩歌をあげて中国説話の影響を説く。七夕は万葉人の風物に対する愛好を根本として取入れ、最初は文人間に行なわれたが次第に日本人の感覚に合うように変化した。

いわゆる戲書義訓 万葉集特講(8) 市村宏

次元(八・二、二月)三頁  
戲書義訓 万葉集特講(6) 市村 宏 次元

(八・一〇、一〇月) 三頁

万葉集に見られる、いわゆる戯書は明治大正に行なわれた宛字と同じで、戯書と呼ぶのは研究の未熟から来ている。戯書義訓は、謎解きから生じた流行が当時あつて、その既成周知の謎語によつたものである。

流人文学 万葉集特講(3) 市村 宏 次元

(八・七、七月) 四頁

顕基から筆・後鳥羽院・順徳院をして世阿弥につづく流人文学は既に上代文学に始まりその代表作たる宅守・狭野弟上娘子の作の他石上乙磨の作があり、懐風藻のその詩は配所の月を見る風雅がかがえるが、万葉集歌には自嘲による戯画化があり、反つて心中の憤懣が見え、寛濶な一面を見せるものである。

葛飾早稻 万葉集特講(4) 市村 宏 次元

(八・八、八月) 二頁

万葉集三三八六番、三四六〇番にはニヘス・ニフナミという語が現われるが、ニフは稲積の意、今日ニホ・ニフと呼ばれているものと同じく、ニフナミ、つまり取護祭に積まれるもので、ニフナミが新穀を神に捧げ、外来者の入ることを堅く拒んだ祭儀のために二首が生まれた。

七車 万葉集特講(5) 市村 宏 次元(八

・九、九月) 二頁

上代に車はまだ発達していなかつたし、万

葉集には広河女王の歌と竹取翁歌との二首があるのみである。前者は恋の重荷というユーモアの最初で、恰もウパニシヤツドの趣があり、後者は中国伝説の引用である。

五 万葉集特講(7) 市村 宏 次元(八・

一一、一一月) 三頁

古代人は玉を愛し、タマは玉であり魂であつて、コロコロと動く状態から心という言葉が出来た。玉にはいろいろ変型の玉が工夫され、万葉人の最も愛したのは真珠で、人麿追和歌の枕に置く玉は死者の靈魂を貯蔵する為のものであつた。

神の花嫁 万葉集特講(8) 市村 宏 次元

(八・一二、一二月) 三頁

今も九州阿蘇谷に残る「神の花嫁」は八岐大蛇の神話のにおいのする人身御供であるが、同じ「神の花嫁」たる伊勢斎宮として万葉集には大伯皇女がいる。皇女の歌は大津皇子の事件にまつわるものであるが、この弟への烈しい情感は、異性に近づくことを許されぬ神の花嫁の、ただ一人接し得る男性への愛情であつた。

## 2 訓 詁

万葉語に於ける二音節接頭語 津之地直一

愛知大学文学論叢(二二・二三合併)開

学一五周年記念特輯、二月) 二三頁

万葉集に見られる二音節の接頭語、一いつ・ゆつ、二たな・との、三たま・たか・ふと・おほ・とよ、四うち・おし・かき・さし、五たち・とり・ひき・ふり、六ひた・はつ・わさ・とこ、七しこ・かた・うら、八やへ・やつ・やそ・やは・やち、九さを・まを・いをについて用例・接続・語意・用法等を概観する。

## 3 解釈・鑑賞

衣干したり 万葉集特講(9) 市村 宏 次

元(八・三、三月) 三頁

持統天皇の歌の「衣干したり」は和訓栞引用の為家の後撰抄の説、濡れ衣を干して虚実を正す神事と考えるのが正しく、集中の一六三八番、一六九八番の衣干すも、疑を晴らす意である。

住吉の浜の小松 市村 宏 上代文学研究

会会報(一一、一一月) 四頁

明軍の姓は余とすべく、仁軍とは兄弟であるが、その作は旅人や家持への至情を表わしている、巻四、三九四番の「浜の小松」も遣孤家持を指したものとと思われる。

万葉筑波嶺權歌試考 市村 宏 文学論藻

(二二、一〇月) 一六頁

動詞カガフの原義は焚火を用いて照明する意で、その名詞形カガヒは照明である。篝火

の故に火祭と呼ばれる神事が多いように、筑波山上の大照明を望んで関東平野の住民がこれをカガヒと呼んだとみる。

万葉集二四一八歌「何名負神」の試訓(一)

福沢武一 歌と評論(三三・四、四二頁)

万葉集二四一八歌「何名負神」の試訓(二)

福沢武一 歌と評論(三三・五、五二頁)

万葉集二四一八歌「何名負神」の試訓(三)

福沢武一 歌と評論(三三・六、六二頁)

一首の訓を「いかなる名おへる神かたむけせば……」と定め、逢瀬のむつかしさの嘆願が遂には夢になりと見ることを祈るところまで来、いまだかなえられずにいる表現と考える。

みかも考 海老原 悟 国語(栃木県高等)

学校国語科研究会(二、九月)四頁

万葉集二四二四番歌に「下野の三嶋の山の」と歌われる毛野国が毛を産する国だという河野守弘の説は、敷物の毛をとるための羊が日本で飼育され、そのフェルト状の織物が古人に可能であると考えられる事から裏づけ得る。

間夜 万葉集特講(四) 市村 宏 次元(八

・四、四月)二頁

万葉集卷十四、三三九五番歌の「小筑波の嶺るに」は「月立し」の序で、「月立し」は月経の意、「間夜」は月経期間の他家生活の期間で夫婦生活の中断される夜をいう。

児手拍の両面 万葉集特講(四) 市村 宏 次元(八・五、五月)二頁

大学の教授であつた背奈行文は物質的に甚だ貧しく愚直一途であつたが、その手を引いて上京した甥高麗福信の榮進はすばらしく、その世を泳ぐ姿に怒を投げた作品が万葉集卷十六の三八三六番歌である。

万葉四二三五番歌考——安多之——の解釈

の一面 清水一茂 上代文学会会報(一

二、一二月)五頁

「富呂爾布美安太之」は「アダシ」と訓み「めちやくちやにふみ散して」と解釈する。

大鳥の羽貝の山考 二 生田蝶介 吾妹(三

八四、一月)二頁

大鳥の羽貝の山考 三 生田蝶介 吾妹(三

八五、二月)三頁

大鳥の羽貝の山考 四 生田蝶介 吾妹(三

八六、三月)二頁

大鳥の羽貝の山考 五 生田蝶介 吾妹(三

八七、四月)二頁

大鳥の羽貝の山考 六 生田蝶介 吾妹(三

八八、五月)二頁

大鳥の羽貝の山考 七 生田蝶介 吾妹(三

三八九、六月)二頁

大鳥の羽貝の山考 八 生田蝶介 吾妹(三

九〇、七月)三頁

大鳥の羽貝の山考 九 生田蝶介 吾妹(三

九一、八月)二頁

大鳥の羽貝の山考 十 生田蝶介 吾妹(三

九二、九月)二頁

大鳥の羽貝の山考 十一 生田蝶介 吾妹(三

九三、一〇月)二頁

大鳥の羽貝の山考 十二 生田蝶介 吾妹(三

九四、十一月)一頁

大鳥の羽貝の山考 十三 生田蝶介 吾妹(三

九五、十二月)二頁

音羽山は古く音石山と書かれ、多武峯の御

破裂も地震と大暴風雨であつたと思われるが大和には火山であつた山が多く、磐石と思われ

れるものは音羽山、多武峯、倉橋川にもあり

万葉集五八八・五八九番の歌によつて音羽山

と多武峯はもとの一つ山であつたと思われ

る。音石山とは爆発を感じたままに伝えた詞

であるが、破裂によつて中央が飛んだ音羽山

と多武峯との姿を、最大の歌人人麿は他の数

限りないことばの創造と共に、形而上の大鳥

の空をゆり動かす大きな羽交と感じ、「大鳥

の羽貝の山」という詞に現わした。五八八、

五八九番の両歌もこの両翼のぬきさしならぬ

間柄を思わせる。

作家の世界観とその作品の表現(万葉集解

釈法の一問題) (一) 小山竜之輔 歌

と評論(三三・一、一月) 四頁

作家の世界観とその作品の表現(万葉集解

釈法の一問題) (二) 小山竜之輔 歌

と評論(三三・二、二月) 三頁

作家の世界観は歌のみならず言葉そのもの

にも作用している事を考えて歌を解釈すべき

である。卷十一「かにかくに」の歌の「飛驒

人の」の「の」、同「千早ぶる神の」の歌の

「わが名の」の「の」、卷二「やすみししわ

ご大君の夕されば」の歌の「わご大君の」の

「の」、同「やすみししわご大君のかしこみ

や」の「わご大君の」の「の」は何れも所屬

の助詞と考える。大津皇子移葬の折の歌は、

「二上山を弟世と吾と見む」と訓み、「君が

在りと言は」は「君が『在り』と言」う意、

卷二倭太后の挽歌「つまの思ふ」は現在形、

「青旗の」の歌の「見れども」は木旗のはた

めきを見ている状態、上掲「夕されば見し給

ふらし」の「らし」や三山歌の「らしき」卷

六福曆歌集中の「偲びけらしき」は連体形と

解する。

万葉集短歌研究(八十六) 浅井俊治・岡

田真・清水房雄・小市巳世司・柴生田稔

・五味保義・吉村陸人・中島栄一・石川

福之助・宮地伸一・内山直・小松三郎

アララギ(五五・一、一月) 七頁

万葉集卷三、三三三番・三三五番・三三六

番・三三七番の各氏による合評。

万葉集短歌研究(八十七) 篠原正直・小

松三郎・宮地伸一・清水房雄・柴生田稔

・五味保義・安達竜雄・安良岡康作・荒

井 孝 アララギ(五五・二、二月) 七

頁

万葉集卷三、三二八番・三二九番・三三〇

番の各氏による合評。

万葉集短歌研究(八十八) 柴谷武之祐・

吉田正俊・宮地伸一・小市巳世司・五味

保義・柴生田稔・生井武司・松原周作・

近藤芳美 アララギ(五五・三、三月)

五頁

万葉集卷三、三三一番・三三二番・三三三

番の各氏による合評。

万葉集短歌研究(八十九) 井出敏郎・近

藤芳美・宮地伸一・清水房雄・小市巳世

司・柴生田稔・五味保義・本村正雄・小

谷 稔・松田芳昭・菅沼知至 アララギ

(五五・五、五月) 八頁

万葉集卷三、三三四番・三三五番・三三六

番・三三七番の各氏による合評。

万葉集短歌研究(九十) 若宮貞次・岡田

真・清水房雄・宮地伸一・荒井孝・柴生

田稔・五味保義・大野一郎・上代皓三

小市巳世司 アララギ(五五・六、六月

) 七頁

万葉集卷三、三三八番・三三九番・三四〇

番・三四一番の各氏による合評。

万葉集短歌研究(九十一) 熊沢正一・扇

畑忠雄・宮地伸一・小市巳世司・柴生田

稔・五味保義・山本和夫・小暮政次 ア

ララギ(五五・七、七月) 六頁

万葉集卷三、三四二番・三四三番・三四四

番・三四五番の各氏による合評。

万葉集短歌研究(九十二) 田中章彦・武

藤善友・宮地伸一・小市巳世司・柴生田

稔・五味保義・清水房雄・加藤淘綾・岡

部光恵・鈴木幸一・樋口賢治 アララギ

(五五・八、八月) 八頁

万葉集卷三、三四六番・三四七番・三四八

番・三四九番の各氏による合評。

万葉集短歌研究(九十三) 岡部光恵・樋

口賢治・宮地伸一・柴生田稔・五味保義

・鈴木幸一・柴谷武之祐・中村行利・駒

木悠二・石川福之助・広野三郎 アララ

ギ(五五・九、九月) 八頁

万葉集卷三、三五一番・三五二番・三五三

番・三五四番・三五五番・三五六番の各氏に

よる合評。

万葉集短歌研究(九十四) 松原周作・上

村孫作・宮地伸一・小市巳世司・柴生田

稔・五味保義・宮本清胤・小松三郎・生井武司・アララギ(五五・一〇、一〇月) 七頁

万葉集卷三、三五七番・三五八番・三五九番・三六〇番の各氏による合評。

万葉集短歌研究(九十五) 宮本清胤・高

安国世・宮地伸一・小市巳世司・柴生田

稔・五味保義・清水房雄・吉村陸人・安

良岡康作・木下 忍・落合京太郎 アラ

ラギ(五五・一二、一二月) 七頁

万葉集卷三、三六一番・三六二番・三六三番・三六四番・三六五番の各氏による合評。

#### 4 作家論

大伯皇女と大津皇子 塚原鉄雄 明日香(二七・一、一月) 四頁

大津皇子は草壁皇子と異質な性格で、その謀反には持統天皇に躍らせられたロポットたちが多い。

持統天皇——大伯皇女と大津皇子(二)——

塚原鉄雄 明日香(二七・二、二月) 四頁

持統天皇は行動性を父からうけたリアリストで、ハムレット型の天武を叱補し、女の執念によつて大津を倒し、軽皇子の成長を待機した。

執念の裏面——大伯皇女と大津皇子(三)——

塚原鉄雄 明日香(二七・三、三月) 四頁

天武崩後軽皇子の帝位継承という使命感の中で、気弱になつた時、吉野行幸が行なわれその女身の秘密と感応する何かを人麿は探り当てていた。

非情の論理——大伯皇女と大津皇子(四)——

塚原鉄雄 明日香(二七・七、七月) 四頁

天武は天智と全く背反する性格をもち、その天武の非情の論理に欠ける点を補つた持統の行動が吉野軍蹶起への点火である。

伊勢の秋山——大伯皇女と大津皇子(五)——

塚原鉄雄 明日香(二七・八、八月) 四頁

大津皇子は諸皇子との関係上、最高の殊遇によつて持統から謀反の挑発をうけ、自滅か謀反かに追いやられる。伊勢下向はこの暗鬱な中央政界からの逃避であり、大伯皇女は純粹で誠実な愛を祈念するほかにはなかつた。

真情纏綿——大伯皇女と大津皇子(六)——

塚原鉄雄 明日香(二七・九、九月) 四頁

取り乱さずに死んでいつた大津皇子に対する大伯皇女の歌は愛の対象の喪失による自己崩壊に陥つたもので、人心取攬を企図して二上山に厚葬された大津に対して女心の真情は

胸中に浸透する。

人麿長歌研究ノート 石川 格 国語(栃

木県高等学校国語科研究会) (二、九月)

八頁

人麿の近江荒都の歌・石見国より上京の歌を中心に分析すると、異相の前半と後半とよりなり、歴史的叙事あるいは空間的叙景による前半部は共同体的世界の生命的交感をとおりもどそうとする感情、後半部はとり残された孤の内省に発する詠嘆と哀傷であつて、この異質の上昇・下降感情を包摂する苦悶の道程が人麿の浪漫的抒情の主体たる個である。

柿本人麿とその終焉 万葉集特講(7) 市村

宏 次元(八・一、一月) 三頁

人麿に関する資料は万葉集以外にはなく、その終焉は斎藤茂吉説に従つて湯抱と考えるが、丹比等麿の擬え報えた歌にある玉は古代葬式に見られる枕に入れた玉で、玉を枕に置くとは死を意味するものである。

人麻呂歌集と七夕歌 橋本達雄 国語の研

究(一、一二月) 一二頁

七夕伝説の伝来は近江朝、帰化人によつたもので、奈良朝以前に貴族間に広く流布していたが、伝来以前に受容の地盤が整つていた事が伝説を身近に感じさせた。人麻呂作と認めてよい七夕歌が巻十五にあるが、用語において人麻呂集の他の歌とその七夕歌は同一人

の作と思われ、伝説の扱ひ方も人麻呂集の七夕歌より作者未詳の七夕歌の方が相当新しく庚辰の年は天武八年と認定出来る。

高市黒人 森朝明 構想(一、一〇月) 七頁

黒人は、人麿が目をつむつた個人的感慨を客観的態度によつて歌つたが、これは個人差によるものではなく、人麿の世界の変貌である。黒人の観照態度は赤人の叙景歌につながらつていくが、赤人が叙景に徹して観照に動揺を見せるのに対して、黒人は自然観照と静かな抒情とが調和して、客観対象と主体との分離が見え、この静寂な観照詩は文学史の新しい傾向として後期万葉に継承されていく。

憶良と中国の関係について 齊藤芳撰 上

代文学会会報(一一、一一月) 四頁  
憶良は在唐中相当の本を読んだらうが、抱朴子はその中の一つである。憶良と白楽天の詩とは詩想の類似性があるが、物の感じ方の相通うところのあるによるもので、七夕の歌も庶民的性格に惹きつけられたと思われ、人生的主題を探りあげる点など、その積極的な主体の姿勢こそ文芸の問題として追求されなくてはならない。

平群朝臣と穂積朝臣 万葉集特講(四) 市村

宏 次元(八・六、六月) 三頁

万葉集卷十六に問答の戯笑歌をとどめる平群朝臣と穂積朝臣とは悪口を言い合える同期生たる平群広成と穂積老人と思われ、共に天平九年九月正六位上から従五位下に昇叙されている。広成は入唐帰国後幾度かの昇進を続けるが、老人は昇進がおくれ、その父老の配流も原因と考えられる。

家持と諸兄 久松澄一 明日香(二七・一、一月) 四頁

家持と諸兄とは密接な関係にある。広嗣の乱にも行を共にしているが、家持は諸兄の庇護のもとで官途につき、天平十八年の雪の宴にも並んで陪し、越中守も諸兄の推薦によつたであろう。越中時代の万葉編纂にも諸兄の資料提供か激励があつたであろうし、兵部省入りも諸兄一家の推薦、防人歌の蒐集も激励が常にあり、諸兄没後家持は因幡国へ離京、大伴家の衰退と共に万葉編纂の仕事も停滞してしまつたのであろう。四四八三の一首は諸兄への挽歌と見られなくもない。

### 三 古事記

#### 1 概説

古事記と儒家を主とした中国思想の関係  
文 涉について(その九) 田所義行 東京  
女子大学附属比較文化研究所紀要(一三

、六月) 六八頁

応神朝から推古朝にかけて多くの海外交渉が記されるが、三国時代、学問のある漢人の帰化があつたと思われ、わが国でもそれを受け容れる施設がなされた。この渡来中国文書はすべて漢魏以後のもので、封建国家の御用学であつた中国の学問のテキストを受容することになつた。これは原始儒学を社会に適合するように整理したものである。従つて当時のわが国奴隸制社会に適合するのではなく、吸入されなかつたのは、後進国の社会情勢としては已むを得ないことである。

周易や尚書らに接した後に古事記が撰述されているので、古事記の国生み神話は固有独得のものであつたか否か疑を挿む余地があるが、考え方がまるで素材であるのは、根本的には封建制社会に無知な、わが国奴隸制社会の人々のテキストを読んだ知識に基づいて、古事記が撰述された結果である。

#### 4 神話・伝説

古代日本人の自然観 松岡一男 愛知大学  
文学論叢(二二・二三合併) [開学一五周年記念特輯]、二月) 一九頁

ギリシヤ神話のデメートルの話は日本神話に似た自然観を伝えるが、芸術と融合したギリシヤ神話と異つて日本神話は政治と結合し

て天皇政治を確立せしめる事になつた。日本の神話にはデメートル神話と共通するイザナギイザナミ神話、水神であるミツハノメ、同じく大蛇の伝説、穀神であるスサノオ、恋愛の成功者たる大國主命が語られて国造りがなされる。神話によつて皇室の起源を探ると、政治力の高まるにつれて、その絶対性を神と考え、天皇存在の究極の意味をこの有力な信仰対象と結びつけることによつた。木の花佐久夜姫、海幸彦と山幸彦の物語を通して背景となつているのは、国を支配した皇室の山と海との支配であり、海神との結婚は海への親しみの感情を反映している。

沙本毘売の物語について 浜田清次 日本文学研究(五、一月)二〇頁

古事記中巻の沙本毘売物語における沙本毘売と沙本毘売との関係は十二の根拠によつて恋愛と考えられるので、この物語の特徴は同母兄妹の恋愛と姦通という二つの不倫にある。沙本毘売の沙本毘古への恋は原始的・英雄的精神への思慕憧憬を示すものであり、原「沙本毘売の物語」は二人の恋愛を主とした伝承であつたのが、古事記には天皇と沙本毘売とに切り換えられ、書紀には狭穂彦の邪悪化と狭穂姫の貞婦化による人間的真實の喪失となつたものである。

## 四 その他

### 2 風土記

常陸国風土記における地方説話 久保田智哉

上代文学会会報(一二、一一月)七頁

常陸風土記の地名説話はモチーフによつていくつかに分類出来るが、この分類において倭武天皇巡幸に関する説話が多く、東夷の開拓が倭武天皇の巡幸、天皇・国造、さらに鹿島神宮祭祀に関して展開されている。この他自然説話もあり、要するに地名説話は言語表象の形式化をより合理化して記憶伝承の説話形成に還元した上代人の私的な昔話の構成方法で、その契機が民衆の信仰意識や生活表象に基づく点が他の説話と異つている。

常陸国風土記覚書 四 大久保強 上代文学会会報(一二、一一月)四頁

常陸風土記には「アメノシタシラシメス」「シラシメス」に六種の用字の使い分けがある。那賀郡の「不朽の義を取りて今は大櫛の岡と謂ふ」は「大朽」が正しく、普通によつて「大櫛」につながるものと考える。

出雲国風土記勅造当時の出雲ことば 加藤義成 国語学(五〇、九月)一〇頁

出雲国風土記の語彙語法には出雲の特殊方言

言は見られず、音韻上も特別の数語以外は極めて中央語に近くて、チニ、ウのオへの転訛、ツのチへの転訛に、特殊な場合の出雲方言の芽生えがあるが、一般的現象としては極めて大和ことばに近かつたと考えられる。

播磨風土記における肥岡の里の地名説話について 和角 仁 国語の研究(一一、二月)一一頁

中央政府の官命によつて編述された風土記の中にトモノミヤツコの一族の祭る神に反抗する説話の収録される可能性はなく、この肥岡の説話は秦氏によつて構成された陶部の存在が、背後にある。播磨に秦氏の存在は大きく、秦氏と族的結合関係にあつた小子部はオナムチを祀祭し、侏儒としてスクナヒコネと深い親縁関係をもつからである。二神との結縁関係を利用し、一方一族の陶部の形姿を反映させた説話は、在地的立場に立つ秦氏の再度の中央進出の姿勢と関連づけて考えるべきであろう。

### 3 祝詞

本朝月令の祝詞 徳田 淨 関東短期大学

紀要(八、一一月)六頁

本朝月令に見える神祇祝詞式は弘仁式のものであり、その祝詞は弘仁祝詞式の逸文で、延喜の祝詞式は弘仁のものを襲いながらも他

の資料を参照して手入れを加えたからであり  
本朝月令に伝写の変遷を生じたからである  
5。

## 5 靈異記

校注真福寺本日本靈異記 小泉道 訓点  
語と訓点資料(二二)(別刊二)、六月  
一四三頁

真福寺本日本靈異記の原文に句読点を施し  
て繙刻、校異を頭注に示す。本文について  
「日本靈異記について」「真福寺本日本靈異記  
について付不忍文庫本」「真福寺本と類徒本  
と日本古典全書本」の解題を掲げ、訓釈索引  
を付する。

## 六 雑

### 1 随想

大和 飛鳥を巡りて 露木悟義 上代文学  
会会報(一二、十一月)七頁

大和三山の畝火を男、耳梨・香具を女と感  
ずる眺望を始めた飛鳥巡りの記。

飛鳥路を訪ねて 奥田利彦 論究日本文学  
(一七、三月)一頁

「焚田津に」の「に」 五味保義 アララ  
ギ(五五、一〇、一〇月)二頁

「に」が方向を示すと考えて誤りを正され

た斎藤茂吉の執念が心を打つ。

### 3 書評・紹介

書評 久米常民著「万葉集の誦詠歌」本  
田義寿 論究日本文学(一七、三月)五  
頁

書評 山本健吉著「柿本人麻呂」 渡瀬昌  
忠 日本文学(一一・九、一〇月)二頁